

より良く生きる——出居清太郎先生の世界—— 第19回

山本博也

(1) 乗り合わせない

私は電車と飛行機と自動車に乗りづめで全国を巡っている。地方に行くとき必ず「先生、いつも御無事で」と挨拶を受ける。中には、「先生が事故に遭われることはないでしょうね」という人もある。そんなとき、「私は事故を起こすような車や飛行機には乗り合わせません」と答える。

(出居清太郎先生の言葉から)

「私が乗っていれば大丈夫」というので

あれば、整備不良の車であろうが、スピード違反をしようが、信号を無視しようが、何か魔法のようなものを使って事故を回避するとでもいうのでしょうか、そんなことができるはずがありません。

多くの人は、自分は事故には遭わないだろうと漠然と考えているでしょう、希望的観測のもとに。数字的にみても、事故に遭う人の割合は非常に低いので、その中には自分は入らないだろう、と。しかしそこには何の根拠もありません。

これに対して、「私は事故を起こすような車や飛行機には乗り合わせません」というのが先生の答えでした。つまり、事

故に遭う車を自分で見つけてそれを避けるといふことをするわけではないけれども、ふつうに予定を立てて行動する中で、事故を起こす車には乗らないことになる、自然にそうなるということです。

それは、「徳を積みめば、必要な時に、必要なものに恵まれる」という先生の信念に基づくものといえるでしょう。

実際先生は、若い時から弱い立場の人たちに物心共に捧げつくすという積徳の行いに努められた方でした。

あれこれ巧（たく）まなくても、ごく自然に、よいめぐり合わせになっていくこと、つまり「仕合わせ」がよいこと、それこそが一番の幸せではないでしょうか。

(2) ナスの種を蒔いて、ウリはならない

すべて結果には原因がある。草花も種

を蒔かなくては生えてこない、咲きもしない。ナスの種を蒔いて、ウリはならない。種を蒔いてあっても、時期が来なければ芽も出ないし、花も咲かない。

(3) なつてくるということ

柿の実がなつた、みかんがなつたという。その「なつた」という意味は、種がまかれて芽生え、成長し、花が咲いて実つたことをいう。病気になつた、貧乏になつた、困つたことになつた―人生において「なつてくる」ことも、すべて種がある。それが時期を得て「なつてきた」のである。

(出居清太郎先生の言葉から)

ナスの種を蒔いたらナスがなる、このように、種に見合う結果が現れるということとは、自然界ばかりでなく、人間界の

出来事についても当てはまるとい
うことです。

ただ人間界の出来事では、ふつうには、
どの種(種たち)がどの実り(実りたち)
になったのかはわからないことがほと
んどです。またその間に何がどう作用し
たかもわかりません。また種が、どうい
う筋道をたどって、結果としていつ現実
世界にどんな形をとって現れるかとい

うこともわかりません。

しかし、わたしたちの身の回りに起き
るすべての現象は、何の脈絡もなく、た
だ無秩序に起きてくるのではなく、何ら
かの種(種たち)まきの必然の結果とし
て現れたもの—と考えることができる
のではないのでしょうか。

植物の種が知らないうちにはえてき
て成長し、花を咲かせるように、人の言
語動作も、それらすべては種となって、
複雑精緻な脈絡をたどって、いずれその
種に見合う実りを生じるということ
ではないのでしょうか。

私たちにできることは、日々の生活の
中で、悪い種蒔きをしないように、良い
種蒔きをするように心がけること
でしょう。

アオサギ 大西 恵



(4) 明日どんなことが起きようとすべて 神の配慮

私自身、明日の朝には血を吐くような
試練が待っているかどうかは知りませ
ん。なれども今夜はゆっくりお風呂に入
って、やすらかに寝ます。明日にどんな
ことが起きようと、すべて神の配慮と信
じているからであります。通らねばなら
ぬ道筋はいやがおうでも通らねばなら
ぬし、また通していただけるのだと信じ
ているのです。安心してはいるのです。

(出居清太郎先生の言葉から)

先生は、私は事故を起こすような車に
は乗り合わさないとおっしゃる一方で、
いかなる災厄をも「神慮の試練」として
受け入れる覚悟を示されています。何事
も、蒔かれた種はいずれ芽生えるという、

世界の原理原則の中でなってくるので
あり、それはそのまま受け入れるしかあ
りません。われわれ凡人が、災厄に出遭
うおそれが常にあり、またそのことを恐
れて取り越し苦労をするのとは正反対
です。

困難や災禍に対して、誰をも恨むこと
なく、明るく、誠実に努力すれば、それ
が良い種蒔きとなって、次の良き実りに
つながります。

困難や災禍も、自分を鍛え、幸せへと
導いてくれるものととらえ、そこにおお
いなるもの(神)の私への慈愛と配慮と
を感じとるならば、それ以上の安心はな
いのではないでしょうか。

発行所 〒170-0011 東京都豊島区池袋本町3-11-1
修養団捧誠会 <https://www.hoseikai.or.jp>